

太神宮 あちこち

第8回

宇須乃野神社

神宮権禰宜 石垣仁久

外宮から見て北西部に広がる高向の地名の由来は種々あるようですが、その一つに外宮に聳える高倉山に対峙するように向かう土地とする説があるようです。その名の通り、古くから外宮とつながり深い土地であったのかもしれない。

その高向に豊受大神宮撰社十六座の一社である宇須乃野神社が鎮座しています（高向公民館近くの南世古）。この神社は平安時代の『止由氣宮儀式帳』（八〇四）と『延喜式』（九〇五）にも記載されており、古くから存在していたことが判ります。

鎌倉時代の『神名秘書』（度会行忠著）は、当社を「高向郷高向村に在り、二社同じ玉垣内。鳥居一基。藪御社と同座なり」と記しています。同座とは異なる神社と一緒に祀られることです。鳥居が一つということ、神社としては一社に見えますが、御垣の中には異なった神社が二社あるのです。そのひとつが藪御社とされますが、詳しい事は伝わっていません。

江戸時代の神宮百科事典とも言える『神宮典略』（藪田守良著）は、藪社として一項目を立て、おおよそ次のように説明してい

ます。

藪とは何を指すのかわからないが地名だろう。

祭神も不明で『神名秘書』は五穀霊神というのが証拠がない。恐らく藪の字からの推量なのだろう。

度会家行の『類聚神祇本源』は藪社と呼ぶ由来は不明としている。行忠の『神名秘書』には「高向村宇須乃野神社、園御社と同座」とあるのだが、付近に園という地名があるのか調査しないとわからない。

また『神名秘書』に「園社は高向神社にある」としている。園社と神社は一緒に敷地にあると思われる。神社計とは神饌の意味とすれば、それを根拠に『神名秘書』は五穀霊神と断定したのである。他に見当たらない神社なので判断が難しい。

また、『神祇本源』に園行嶋社という神社も出てくるが、それも詳しくはわからない。

ここで説かれた藪・園は、神に供える野菜などを産する土地で、神計（御饌）は供え物の事です。恐らく古くは高向が

外宮の御園の役を果たしていたのが、次第に他所に移ったために本来の意味がわからなくなつたのではないだろうか。（現在神社港に外宮撰社の御食神社があります。神計神社との関係は不明です）

外宮の御巫清直の『二宮管社沿革考』は、「御籠木帳に、宇須野社とある。この社は今も高向村にあり、住民はモリ社と呼んでいる。」と記しています。

この記事を少し説明すると、当時宇須乃野神社は所在不明となつており、寛文三年（一六六三）にモリ社と呼ばれる土地に再興したので、外宮末社の毛理神社が昔あつた場所に宇須乃野神社が再興されたのではないかと話になったようです。しかしそれは誤解で、宇須乃野神社の祝（地元管理人）を高向の森氏が務めていたので、モリ社と呼んでいたのが原因のようで毛理神社とは関係がないようです。

なお現在は、外宮八末社のひとつと併社が同座しています。さて、神社の名称を正式には社号といい、多くの場合は御祭神やその御神徳、鎮座地などに関連しています。宇須乃野とは、漢字の充て方から見て「宇須乃」、もしくは乃を格助詞「の」とみて「宇須の野」という地名が先ず浮かびます。次に思い浮かぶのが臼です。

臼と日本人の関係は古く、登呂遺跡などからも出土しており、弥生後期の銅鐸にも臼が描かれています。臼の上部は窪んでいるので、宇須野とは臼のように窪み地形をいうのか、元の鎮座地が不明のままでは確かめようがありません。

脱穀や製粉に用いる石製の挽き臼の普及は、日本人の食生活に革命的变化を与え、食物を粉にして保存する技術が未発達であった時代に、祭日の「ハレの日」の特別な食べ物であったダングなどが、日常的な「ケの日」の食べ物に移行したことを民俗学者の柳田国男は『木綿以前の事』で指摘しています。

このように臼は日本人の食生活と深く関わってきた道具ですから、宇須乃野神社の社号となつた可能性もありますが、挽き臼の普及は室町時代で、平安時代の記録には既に宇須乃野が出ていますので、社号の方が早かつたかもしれません。

また、高向は宮川流域ですからウスノのスは、州に關係している可能性もあります。古代の宮川は現在のように伊勢湾に向かって直進しておらず、支流を含め多くの流れが山田原を分流していました。それが「百船の度会」（多くの船が渡りあう）という枕詞を生み、その水利こそが外宮の度会氏繁栄の基だったわけですが、宇須乃野神社が外宮

の撰社であつた理由もそのあたりにあるのかもしれない。現在一面の陸続きの高向回りも、古代は宮川支流が複雑に入り組み、州を形成していたとしても不思議はありません。しかしながら、高向周辺を実際に歩いてみると、起伏のない平坦な土地であることがわかります。かつて河川に挟まれた中州であつたように見えませんが、もっと広い意味での州だったのかもしれない。

最後に宇須乃野は、ススキが生い茂る「薄野」、もしくは「薄の野」などが語源なのかもしれない。ススキをお月見の時に飾る風習があるのは、太陽と稲の組み合わせの裏返しで、月と薄がセットになつていくからです。中秋の頃、最も力を持った満月の光を受け、野原に生い茂る薄は聖なる植物となり、お祓いなどの呪術に用いられました。このことは薄が生活に不可欠な植物であつたことを物語っています。

六月と十二月の大祓の日に潜る茅の輪は茅葺で作られますが、茅葺と薄はよく似た性質があります。最も注目したいのはそれらが屋根を葺くのに適していることです。

河原に面した高向は、外宮の屋根を葺く材料を求めた土地との関係も深かつたのではないでしょう。か。

（丁）